



成人向

店長！診てもらった方がいいですよ！



circle: THE HYPERMAN

この日、杏〇は大食いが過ぎて店に打撃を与え続けた結果「病院で検査してもらったらどうです？」と、「冗談ではあつたかもしれないが、そんなことを言われてしまったため実際に病院を訪れていた。



「普段から食べ過ぎてしまう、ということですね。」  
「そう言ったら医者がおもむろに綿棒を取り出した。」  
「では検査を始めますので。」

「そう言ったら、突然腰に手を回してきた。」

「な、なんだ急に。」

「杏〇は少し驚いた様子を見せるが、」

「分泌物を検査しますので、こちらの方が精度が高い  
んですよ。」

「そ、そうなのか。」

「医学的知識を持ち合わせてない杏〇は素直に従う  
しかない。」

「みなさん抵抗があるのはわかるんですけどねー、で  
も精度が高いので少しの間だけ我慢してくださいね。」

「じゃあちよつと、そこに四つん這いになってもらっていていいですか」  
そう言われ、診察台に上がる杏〇。

「ちよつと気になる点があるので他の検査も一緒にやっちゃいますね」  
医者はそう言いながら杏〇の陰部に指を出し入れしている。  
「あ、ああ」  
杏〇は不快な気持ちを抑えつつも身を委ねる。



「○○君、ちょっとおねがい」  
医者がそう言うのと、杏○の体が突然  
後ろから持ち上げられた。  
「お、おい、こんなことホントに必要な  
のか!?」  
杏○は狼狽えるが、医者は平然と  
している。  
「心配しなくて大丈夫ですよー  
みなさんされてますからねー」





「ちよつと体勢変えてみま  
しょうか」  
そう言つて、体勢を変えさ  
せては陰部を執拗に弄り  
続ける。  
「…んっ…うっ」  
「どうしました？大丈夫  
ですか？」  
「あ、ああ」

「では「こちらの器具でね  
検査を進めますので」  
「ほ、ホントにこんな……っ」  
その器具が陰部に出し入れ  
される度に杏〇の体がびくり  
と反応する。  
「大丈夫ですよー、みなさん  
されてることですから」



「ちよつとお薬入れますね」  
「医者はそう言つて、何やら薬  
のチューブを杏〇のアナルに  
挿入した。」  
「やっ、やめ……！」  
「ジツとしてくださーい」  
「杏〇はもがくが、体をpushさえ  
付けられているため身動きは  
取れない。」  
「検査をしやすくする薬です  
ので、心配ないですよー」  
「そんなこと……んっ！」



「……う……あう」  
「白〇さん、白〇さん？」  
「医師はしきりに患者の名前を呼ぶが、杏〇の意識はハッキリしない。」  
「白〇さーん、これから、別の  
お薬を注入していきますよー  
聞こえてますかー」  
「あ……は……」  
朦朧とした意識の中、杏〇は  
何も判断することができなくな  
っていた。





「……あつ……くっ」  
「あ、白〇さん気が付きましたかー」  
「な、なに……を」  
「お薬を中に注入してるんですよー  
きつと治りますからねー」  
「そっ……なのか……んっ」  
意識を取り戻した杏〇だが、薬の  
影響で頭が混乱しており、それが  
医療行為であると頭が認識してし  
まった。



「ほ、ホントに治療…んっ、なのか」  
「そうですねー心配しなくて大丈夫  
ですからね」  
「ちよっとお薬足りないみたいなので  
これ飲んでいただけますかー」  
「あ、ああ」  
杏〇は疑いもなく、口元に運ばれた  
コップから謎の液体を喉に流し込んだ。  
「はあ…はあ」  
杏〇が拘束されるベッドは杏〇の体液  
でビチョビチョに湿っていた。



「白〇さーん、お疲れさまでした」  
「う……あ……」  
「治療は終了ですよー」  
杏〇の陰部から白濁の粘性の液体が  
どろりと落ちる。  
「調子が悪いようでしたら、今日1日  
だけ入院して様子みましょうか」  
杏〇の意識が正常に戻らないまま  
治療行為は1日中続いた。

翌日、無事退院となった杏〇に昨日の  
記憶は無く、多少の違和感を抱えつつ  
日常に戻るのだった。























